

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2407 号

Polyglycolic acid sheet and fibrin glue for preventing esophageal stricture after endoscopic submucosal dissection: a historical control study

(内視鏡的粘膜下層剥離術施行後の食道狭窄予防術としてのポリグリコール酸とフィブリン糊併用療法 ヒストリカルコントロール研究)

飯塚 敏郎 (いづか としろう)

博士 (医学)

論文内容の要旨

表在食道癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) は広く行われている。広範囲な ESD を施行した場合、食道狭窄が発生し QOL の著しい低下をきたす。その対策としてステロイド局注療法や内服療法が主に行われている。しかし感染症や B 型肝炎の再活性化などのためステロイドが使用できないケースも経験される。我々はポリグリコール酸 (PGA) シートとフィブリン糊を用いて ESD 後の狭窄予防が可能であることを報告してきた。そこで今回、ステロイド局注療法との比較検討を後方視的に行った。対象は 2012 年 1 月～2016 年 7 月までの間に施行された食道 ESD 症例 400 例 489 病変のうち、組織学的に食道扁平上皮癌で ESD 後の粘膜欠損が半周を超えると想定され文書にて同意が得られ、前向きに登録した 39 症例である。これを PGA 群とした。病変が頸部食道もしくは食道胃接合部かかる病変、瘢痕部にかかる病変、術前化学放射線療法などの加療を受けた症例、同時にステロイド内服を行った症例は除外した。一方同時期に ESD 後粘膜切除が広範囲となり、ESD 直後にステロイド局注が施行された 31 例をコントロール群とした。背景因子としては、PGA 群においては、男女比 30 : 9、平均年齢 69.7 歳、病変の部位は上 : 中 : 下部食道で 5 : 23 : 11、平均腫瘍長径は $39.4 \pm 10.2\text{mm}$ 、ESD 後粘膜欠損は 3/4 周末満が 10 例、3/4 周以上が 29 例であった。一方局注群では、男女比 25 : 6、平均年齢 67.1 歳、病変の部位は上 : 中 : 下部で 6 : 14 : 11、平均腫瘍長径は $39.4 \pm 15.1\text{mm}$ 、ESD 後粘膜欠損は 3/4 周末満が 11 例、3/4 周以上が 20 例であった。いずれも両群間に差は認められなかった。ESD 後外科的手術を受けた症例を除外して検討すると、狭窄を呈した症例は、PGA 群で 3 例 9.1%、局注群で 3 例 10.3% であり、両群間に統計学的有意差は認められなかった。一方拡張回数は PGA 群で平均 0.057 ± 0.24 回中央値で 0 回、局注群で平均 1.9 ± 5.1 回中央値で 0 回であった ($p=0.95$)。結論として、食道狭窄に対する予防効果は、PGA 群、局注群ともに統計学的有意差はなく良好な結果であった。PGA シートとフィブリン糊は ESD 後狭窄に対する有望な予防策の一つになることが示唆された。